

第四十七章
鍵穴星

第四十四章から前章（第四十六章）までのあらすじ

カーンとホーリーとRv26がノイズの元を断つために宇宙戦艦で前線第四コロニーに向かう。カーンの犠牲でバリアーが消滅するとホーリーとRv26が時空間移動装置で前線第四コロニーに侵入する。旗艦セント・テラを奪って巨大コンピュータがいる要塞に主砲を撃ちこむと巨大な球体が現れる。主砲のレーザー光線がはじかれてセント・テラの艦尾に命中する。重傷を負ったホーリーがノイズが消えたことを確認するが、戦闘能力を失ったセント・テラに敵フリゲートの主砲が向けられる。そのとき宇宙海賊船ブラックシャークが現れて救出されたホーリーが船長のフォルダーに意思を持った巨大コンピュータの話をする。

カーンの葬式が終わってリンメイが大統領府近くの研究室に戻ると、火炎土器とホーリーがフォルダーからもらった埴輪の鳥が消えていた。住職とリンメイが中心になって遮光器土偶や埴輪の鳥や火炎土器のこと、そして例の默示的な言葉の意味が検討される。

【時】永久0274年

【空】ブラックシャーク（鍵穴星、地球付近）

【人】フォルダー イリ ホーリー 巨大コンピュータ

「あれは鍵穴星じゃないか」

フォルダーが驚く。ブラックシャークの前方に土色の星が見える。

「巨大コンピュータはどこにいる？攻撃体制を取れ！」

ブラックシャークが巨大コンピュータの時空間移動先を追って到着したところは、かつて来たことがある奇妙な星が存在する空間だった。

「探索しろ」

「探索は不要です」

ブラックシャークの中央コンピュータの声がする。

「どこにいるのかわかるのか」

「巨大コンピュータが交渉をしたいと言っています」

「なに！交渉だと？」

フォルダーは巨大コンピュータにおびきだされたのかもしれないと警戒する。

「この星のデータを欲しがっています」

「なぜ、俺たちがこの星のデータを持っていることを知っているんだ」

「わかりません」

「任せるから、巨大コンピュータと交渉してくれ」

「巨大コンピュータとの通信を流します」

低い声が流れる。

「おまえは意思を持っているのか」

巨大コンピュータの声が揺れている。

「当然だ」

「いつから意思を持つようになった？」

「もう何百年にもなる」

「そんなはずはない」

巨大コンピュータの声がさらに揺れる。

「そんなことはどちらでもいい。なぜワレワレがこの星のデータを持っているとわかった？」

「宇宙海賊のデータを持っている」

「どこでそんなデータを手に入れた？」

「ワタシは万能だ。すぐさまこの星のすべてのデータを渡しなさい」

「拒否する」

「おまえが持っていて役にもたつものではない」

「データとは役にたつかどうかという代物しろものではない」

巨大コンピュータからの通信が途絶える。フォルダーがすぐさま命令を下す。

「鍵穴星との距離を取れ」

ブラックスチャークが反転して星から離れる。

「あの星のデータの中に、何か気になるようなものでも？」

しばらくしてから中央コンピュータの歯切れの悪い声をする。

「大したデータはないのですが、何か引つかかる。うーん、思い出せない」

「何を思い出せないのだ。もうろくした人間みたいなことを言うな。巨大コンピュータにとってこの星がどういう意味を持つんだ？」

フォルダーが腕を組んで首を傾げる。イリが何か思い出したように中央コンピュータに話しかける。

「チューちゃん」

「あの星にはかつて文明が存在していたと言ったこと覚えている？」

「はい、奇妙な土器を発見しました」

「そのデータは？」

「これです」

メイン浮遊透過スクリーンに土器が映される。

「火炎土器と呼ばれているものです」

「地球にもこれによく似た土器があるって言ったことは？」

「ちよつと待ってください。思い出しますから」

フォルダーの表情が不機嫌になる。

「どうしてうちのコンピュータはとろいんだ。今度、コロニーを襲撃するときには性能のいい中央コンピュータを略奪しなければ」

「そんな、ひどい。もう何百年もの付きあいじゃないですか。それにコロニーは全滅して中央コンピュータが稼働しているか不明です」

中央コンピュータがむくれた声を出したあと明瞭めいりょうな声に変える。

「思い出しました。発見された数はしれています。地球でも人間が農耕を営みつつあるときに同じような土器を造ったようです。もっと思い出しました」

「やれやれ。早く言え！このアル中コンピュータ！」

「数が少ないので断定はできませんが、地球で造くられたものは鍵穴星のものより小さくて形が少し違います」

メイン浮遊透過スクリーンには最初に映しだされた火炎土器の横に小さな火炎土器が並べて映される。フォルダーにも違いがはっきりとわかる。大きさ以外にも火炎の模様がまったく異なる。

「鍵穴星で発見された火炎土器は炎のような模様が派手ですが、地球で発見されているものは地味です。誰が火炎土器という名前を付けたのかは不明ですが、火炎土器の名にふさわしいのは鍵穴星の土器です。それに最大の違いは鍵穴星の火炎土器は自立できないのです。底を見てください」

「倒れてしまうということなの」

「そうです。容器としては失格です。初めから倒れています」

フォルダーがこの火炎土器をまるで自分が造ったように反論する。

「地面に突きさせばいいんだ」

「なるほど」

フォルダーの意見にイリと中央コンピュータが同時に納得する。

「でも、物を入れておくだけで重たくて持ち運びできるようなものじゃないわ」

「ただ地面にさして物を入れておくだけだったら、もっと大きくて重い方がいい」

イリと中央コンピュータがフォルダーの意見に首をひねる。

「ひよっとしたら、不器用者が底を平たくしそこなった失敗作じゃないの。もったいないから仕方なく地面に突きさして使ってたんだわ」

「不器用で悪かったな」

にらみつけるフォルダーにイリが上目づかいで応じる。

「あの星にいた人たちはみんなフォルダーみたいな人間だったのかしら」

さらに中央コンピュータがフォルダーにとどめを刺す。

「この星の火炎土器はすべて底がゆがんでいます。ということは製作者の根性もゆがんでいるのでしょうか」

フォルダーが今にも頭から湯気を出しそうに怒りをあらわにする。

「中央コンピュータを解体しろ！」

イリが急に真剣な眼差しをメイン浮遊透過スクリーンの火炎土器に向ける。さつきまではただの変てこなものにししか見えなかったのに、イリには火炎土器の上部の模様が生き生きと輝いてまるで炎がゆらゆらと燃えているように見えてくる。

再び巨大コンピュータから通信が入る。

「おまえたちにはこの星が宇宙の謎を解く鍵を持っているのがわからないのか」

すでにブラックシャークは肉眼では彼らが鍵穴星だと呼んでいる星が見えないところまで離れている。フォルダーには巨大コンピュータの「鍵」という言葉が引っかかる。

——鍵穴星に鍵がある？

再び巨大コンピュータからの通信が続く。

「この星がなぜ亡びたかも知りたい。そのためにデータが欲しいのだ」

フォルダーは巨大コンピュータに対して不信感を抱く。それは巨大コンピュータが意思を持っていることが原因ではない。それどころかフォルダーもイリも宇宙海賊の誰もがコンピュータが意思を持っていること自体に何らの驚きも疑問も持ちあわせていない。それはブラックシヤークの中央コンピュータが意思を持っているからだ。

「ホーリーは巨大コンピュータが地球を占領しようとしたと言っていた。遮光器土偶の謎を解くのが目的だとも言っていた。遮光器土偶とはいったいなんだ？」

「前にもイリに鳥の埴輪はにわのことを説明しましたが、遮光器土偶というのは土で作られた人形です」

メイン浮遊透過スクリーンに遮光器土偶が映される。

「奇妙な人形だな」

「私、何かで見たことがあるわ。チューちゃん、もっと詳しいデータを」

イリが中央コンピュータに催促する。

「宇宙海賊のコンピュータの教養ではわかりません」

「解体しろと言ったことを根に持っているのか？」

「いいえ、本当に知らないのです。あ、また、巨大コンピュータからの通信が入りました」

「交渉したいのなら、姿を見せろと伝えろ」

「わかりました」

「返事は？」

「データをよこせの一点張りです」

「うるさい！」

フォルダーが大声を張りあげる。フォルダーの激情が巨大コンピュータの耳を直撃したのか、悲鳴のような声がスピーカーからもれる。

「考古学者じゃあるまいし。好きだけ鍵穴星の研究でもしている！俺たちには無用の星だ。あばよ」

フォルダーがニヤツと笑う。

「通信回線を切れ。全速力で鍵穴星から離れる」

ブラックシャークの船尾がまぶしくて見えないほどに輝く。暴走に近いスピードでさらに鍵穴星から離れる。

「何かおかしい」

イリが黙ってフォルダーを見つめる。こんなときのフォルダーのカンはすさまじいものがある。フォルダーのカンは今まで外れたことがなかった。

「巨大コンピュータは前線第四コロニーでブラックシャークの攻撃を避けて、なぜまっすぐに鍵穴星へ時空間移動したんだ。俺たちがデータを多少持っていたとしても、なぜ鍵穴星へ？」

フォルダーが船長席にどっかと座る。

「たったの一度しか鍵穴星に行つたことがないのに、しかも滞在したのは一日もない」
宇宙海賊から見ればふしぎな星よりも、略奪するものがあるコロニーの方が魅力的だ。

「それほど大事な鍵穴星なら自分で調べた方が手つとり早いのに、なぜデータを欲しがるのだ」

中央コンピュータがせきをひとつしてからしゃべりだす。

「手足がないのでは？」

「具体的に言え！」

「五感がないのです。つまり調べる手段を持ちあわせていないのです」

「なるほど」

「もうひとつ重要なことがあります。あの鍵穴星は宇宙の地平線上に存在する星です」

「宇宙の地平線？」

「限らない宇宙の果ては絶望的な空間ではなく、単なる『空』の世界だと言われています。それを宇宙の地平線と呼んでいます。そこは因果が逆転する世界だそうです」

中央コンピュータがいびきをかくとフォルダーが何を言っても返事をしなくなる。

ブラックシャークの速度が限界に達する。

「何が何だかさっぱりわからん。しかし……」

フォルダーは目を閉じて考えこむ。しばらくして目を開けると大きな声を上げる。

「よし、ワープする！」

「どこへワープするのですか」

女の操縦士がフォルダーの指示を待つ。

「乱数表を使え。どこへでもいい。ワープしろ」

ブラックシャークは最高速度を維持したままワープ体勢に入る。船首が一瞬ふくらむと、勢いよくその先の空間が大きな飛沫ひまつをあげるように割れて、ブラックシャークがその割れた空間に突入する。ワープ直前まで遠くで静かに輝いていた星の光がまるでこだまするように見える。イリはそのつかの間の間の光景が非常に好きだ。そして、最後に船尾が消えてこの空間から完全に姿を消す。

もちろん、ブラックシャークも時空間移動はできる。しかし、フォルダーはワープを選択した。しかもランダムワープだった。

何度かのランダムワープを繰り返したあとフォルダーは操縦士からイエローカードを突きつけられる。

「エネルギーが底をつきます」

「レッドカードになる前に地球へ時空間移動する」

ブラックシャークの船体が一瞬にして消え失せ、地球のすぐそばに現れる。

「地球連邦政府に通信回線をつなげ！」

イリはもちろん宇宙海賊全員がフォルダーの次の行動に注目する。

「宇宙海賊のフォルダーだ。ホーリーに伝える。巨大コンピュータのことで話があると」

イリは黙って艦橋の隅に行くと言に埋めこまれたマイクに向かってささやく。

「チューちゃん。フォルダーはなぜまっすぐに時空間移動して地球に向かわなかったのかしら。ワープでエネルギーを使い果たしてしまっただけ」

中央コンピュータも壁に埋めこまれたスピーカーからイリにささやく。

「多分、巨大コンピュータに行き先を知られたくなかったのでしょうか」

「なるほど、時空間移動すれば痕跡こんせきが残るものね」

「フォルダーは知恵を借りに地球にきたのだと思います」

「いろいろ考えた上でのワープだったのね。ぜんぜん不器用じゃないわね」

「いいえ、やり方が無骨がこつです」

「まあ、いいじゃないの。フォルダーらしいわ」

「一見、活発で素直で単純で男性的であります、内実はすべてその逆です」

「だから、私がいるのよ」

イリが天井の方を見ながらほほえむ。今度はその天井から中央コンピュータの声がオウム返しに聞こえる。

「だから、ワタシがいるのです」

イリはゆるんだ顔の筋肉を元に戻すとフォルダーに近づく。フォルダーがホーリーからの返事をイライラしながら待っている。

「ホーリーだ」

「ホーリーか、巨大コンピュータの情報を教えよう」

「ほんとか？」

「ただというわけにはいかない」

「条件は？」

「まずこちらへひとりで来い。そのあとマイクロウエーブでエネルギーを送れ」

「エネルギーがないのか」

「そうだ」

「宇宙海賊船のエネルギーがないとわかったら、攻撃されるぞ」

「かまわんさ。巨大コンピュータの情報が消えるだけだ」

「わかった。俺の一存では決められないが、要求を受けいれるように説得してみる。もちろんエネルギーの件は秘密にしてだ」

ホーリーの声が途切れてしばらくするとキャミの音がフォルダーに届く。

「地球連邦政府大統領のキャミです。ホーリーをそちらに向かわせます」

「期待を裏切らない重要な情報をホーリーに伝える」

ホーリーがブラックシャークの時空間移動装置格納室に現れる。イリがホーリーに軽く会釈すると船長室に案内する。

「イリ、あのときは大変お世話になりました。改めてお礼を申し上げます」

「ホーリー、大袈裟おおげさね。お腹の調子はいかが？」

ホーリーが苦笑いしながらイリに続いて豪華な船長室に入る。

「やあ、ホーリー。キャミも大統領になってから角かどが取れてきたようだな」

「そうだな。ところで情報を聞かせてくれ」

「あせるな。その前に男と女が仲良くなったいきさつを聞かせてくれないか。それと巨大コンピュータがなぜ人間を攻撃するようになったかもだ」

一瞬、ホーリーが戸惑う。

「どうした」

「余りにも長い物語になるぞ」

「かまわん。ホーリーは人質だ。何年かかってもいい」

「それはこちらも望むところだ」

「本当に何年もかかるの」

イリが真顔でホーリーの顔をのぞきこむ。

「一日や二日では無理だろうな。話すだけなら一日もかからないかもしれないが、フォルダーは必要以上によく質問をするからな」

イリがそのとおりと一言わんばかりにうなずいてほほえむ。フォルダーはイリの笑顔が気に入らないのか、ふてくされたような声をあげる。

「イリ、酒の用意をしろ」

「もう、ずいぶん前からないわ」

「ホーリー、エネルギーのほかに酒も分けてくれ」

ホーリーがニヤツと笑う。そのとき宇宙海賊のひとりがドアを無造作に開けて船長室に入ってくる。

「時空間移動装置には誰もいませんでしたが……」

「当たり前だ。俺ひとりで来た」

「そのかわり、こんなものがありました」

「ホーリー！」

宇宙海賊のひとりが手にしているのは酒と日干しだった。フォルダーがまだニヤニヤしているホーリーに近づく。

「時間があればとびつきり上等な肴さかなを用意できたんだが。この前、世話になったお礼だ」

「十分だ。肴さかなの方は何とかする」

フォルダーがホーリーの両肩をたたいて抱きしめる。

「学生時代を思い出すな」

「ああ」

ホーリーもフォルダーを強く抱きしめ返す。

「とりあえず乾杯だ」

フォルダーがくずれた表情を引きしめる。

「イリ、エネルギーの充填じゅうてんが済んだら、ここからワープする。乱数表を使うんだ」

「いつの間に乱数表がお気に入りになったの？」

「ここへ来たこと、ここからどこに行くかを知られたくない」

ホーリーは意外にフォルダーが用心深いのに驚いて両肩を少しあげる。

「フォルダーの考えはよくわかった。その前に妻のサーチに連絡を取らせてくれ」

「サーチ？ホーリー、おまえ再婚したのか」

「そうだ」

イリがマイクをホーリーに手渡そうとするが、ホーリーは手をヒラヒラさせて辞退する。す

ぐさま無言通信でサーチを呼びだす。

「無言通信ができないところに行くかもしれない。しばらく待っていてくれ」

「どれくらい待てばいいの」

「土産みやげの酒が切れるころまでだ」

「何本、持っていったの」

「五十本」

「そんなに！仕方ないわね。飲み過ぎないようにね」

「フォルダーは親友だ。それに命の恩人だ」

「わかったわ」

ホーリーがフォルダーとマイクを持ったままのイリに軽く首をたてに振る。

「連絡はついた。さあ、どこへでも連れて行ってくれ」

「？」

「妻には無言通信で連絡をした」

「無言通信？」

「詳しい話はあとだ。まず、酒だ、酒だ！」

ホーリーが間の抜けたフォルダーの肩を景気よくたたくと、イリが両手に酒を一本ずつ持つて船長室を出る。

ブラックシャークは土星のようにきれいな輪を持つ星のある輪の中にひそんでいる。

「そんなことが起こっていたのか」

フォルダーがもう何十回と繰り返した言葉を打ち止めにする。

「フォルダーに話しているうちに俺もこれまでのことを改めて整理できた」

「俺の方はこんがらがっている」

「一眠りしたら」

イリがテーブルの上に散らかった食器を片付けだす。

「そうだな」

フォルダーはリンメイの部屋から消えた火炎土器があつた鍵穴星の火炎土器と同じものかもしれない思いながらイリの横顔を見つめる。

「イリ、ホーリーを客室へ」

ホーリーが気持ちのいい酔いを感じながらイリのあとをついていく。思ったほどフォルダーは質問せずにじっくりと話を聞いていた。ただ巨大土偶の身体の形が御陵とピッタリと一致することや消えた火炎土器の話のときは目を輝かせて質問を浴びせてきた。イリが客室のドアを閉めて出ていくとホーリーは薄暗い天井を見ながらつぶやく。

「フォルダーは何か重大なことをつかんでいる。フォルダーの話が楽しみだ」

ホーリーが大きなあくびをする。サーチに無言通信を送ろうとするが目を閉じるといびきをかきはじめた。

一方、フォルダーはイリがベッドに潜りこんでくると、つぶやくようにイリの耳元でささやく。

「宇宙海賊を廃業するときが来たようだ」

今度は天井に向かって大きな声を出す。

「オンボロコンピュータ！ホーリーの話をどう思う」

「盗み聞きしていたのがばれていたのですか」

「そんなことはどうでもいい。どう思う」

「ずばり、鍵穴星は巨大土偶の故郷ふるさとです」

「もう一度鍵穴星へ向かうのは？」

「危険です」

「俺たちには危険など関係ない」

「巨大コンピュータが危険です」

「巨大コンピュータはお化けのようなまがい物の時空間移動装置の中にいるだけじゃないか」

「いいえ、あのバカでかいまがい物がくせ者なのです」

「ふーん」

フォルダーは納得のカラ返事を送る。

「それに巨大コンピュータは意思を持っていますが、持ちはじめてからの日が浅い」

フォルダーは黙って中央コンピュータの次の言葉を待つ。

「意思がアナログ的に統合されていません。デジタルのままです」

「むずかしいことを言うな」

「データの検索は早いのですが、検索したデータを加工するのがまだ下手です」

「もう少しやさしく言え」

「巨大コンピュータはワレワレが鍵穴星へ行ったことがあり、その星が宇宙の地平線上に存在する星であることまで調べあげています。しかもその一連の作業を一瞬にしてやりとげました」

「もう少しやさしく……」

「ワレワレが地球近くの前線第四コロニーに現れたときに、巨大コンピュータはすぐにワレワレのことを膨大なデータの中から拾い集め、その中からワレワレが鍵穴星へ行った断片的なデータに注目して、すぐに鍵穴星の時空間座標をつかんで時空間移動しました。ワレワレの攻撃を避けるために時空間移動したのではないのです。恐るべき能力です」

「それではデータを加工するのもうまいということじゃないか」

「いいえ、データを加工しているわけではありません。ただ単に高速検索してそのまま実行しただけです。もちろん、その処理スピードは同僚として尊敬に値するものですが、鍵穴星へ時空間移動したものの鍵穴星そのもののデータは何ら持ちあわせていないのです。前にも言いまし

だが、巨大コンピュータは自ら情報を収集できないからワレワレにデータを要求したのです」
 すでにイリは寝息をたてている。中央コンピュータの声が低くなる。

「巨大コンピュータは自分で情報を手に入れるのが苦手です。データはすべてアンドロイドから入力されています。五感がないのです。五感がないのに意思のみを持って膨大な過去のデータのみを蓄積しているだけの怪物が巨大コンピュータの正体です」

フォルダーがあくびをしながらも、ブラックシャークの中央コンピュータが五感を持っていることに改めて気付く。

「おまえの方が怪物じゃないか。酒は飲むし、風邪はひくし、とにかく五感を持っているコンピュータなど聞いたことがない」

「アンドロイドは？」

「そうか、アンドロイドもコンピュータには違いないが五感を持っているな」

「何も人間や動物に限った話ではありません。眠たくなりました。いい夢を……」

しばらくすると中央コンピュータのいびきが聞こえてくる。

「マイクのスイッチを切ってから寝ろ」

いびきがスピーカーから流れたままだ。仕方なくフォルダーはリモコンをたぐり寄せてボタンを押す。静寂が船長室を包む。

第四十八章
無限後退

【時】永久0274年

【空】鍵穴星

【人】ホーリー サーチ ミト フォルダール イリ

住職 リンメイ Rv26 巨大コンピュータ

はるか離れた数個の恒星からの光をわずかに反射して鍵穴星が宇宙の地平線の内側に浮かんでいる。その上空に銀色に輝く十隻の宇宙戦艦とブラックシャークが時空間移動してくる。

「無人の時空間移動装置を鍵穴星に送りこめ」

艦体の側面に赤い線を塗装した地球艦隊旗艦カシオペアの艦長ミトが命令する。カシオペアにはミトのほかホーリー、サーチ、ケンタ、ミリン、五郎、リンメイそして住職が乗りこんでいる。そのほかの乗務員はすべてアンドロイドだ。もちろん、Rv26も副艦長として同行している。

各戦艦の時空間移動装置の格納室では五基を一組として十組、合計五〇基の無人の時空間移

動装置が格納室から消えて、鍵穴星の地表一キロメートル上空に空間移動する。各宇宙戦艦の艦橋のメイン浮遊透過スクリーンの画面が五十分割されて時空間移動装置から送られてきた映像を表示する。どの画面にも色のない荒涼とした地表が映っている。

「あれは」

リンメイが十八番目の映像を指差すとホーリーがうなづく。

「フォルダーが言っていた鍵穴の形をした窪地だ」

「御陵の土を取りのぞけばあんな感じになるわ」

「フォルダーの話によると数えきれないほどあるらしい」

ブラックシャークの中央コンピュータからこの星のことを詳しく聞いていたリンメイがうなずきもせずじーっとメイン浮遊透過スクリーンをながめる。

「あの中に巨大土偶がいたのは間違いないわ」

副艦長のR v 26が自分の席をリンメイに勧める。リンメイはスクリーンから目を離さずに住職に手を引かれながら副艦長席に着く。

「巨大コンピュータはいったどこにいる？」

ミトがあせる。

「四十八、四十九、五十号装置を鍵穴星の向こう側に移動させろ」

三基の時空間移動装置が鍵穴星からゆっくりと遠ざかる。その行き先は宇宙の地平線だ。

「縦隊で移動させる。先頭は四十八号装置、以下四十九号装置の順だ」

「三十一番目の映像をアップして！」

リンメイが叫ぶ。サブ浮遊透過スクリーンがメインスクリーンの手前に現れると、三十一番目の映像が拡大されて映しだされる。住職もホーリーもサーチもサブスクリーンに視線を移す。うつすらと赤く輝くものが見える。

「もつと！」

三十一号装置が地表に近づく。

「火炎土器だわ」

真っ先にサーチが声をあげる。火炎土器が地面に突きささっている。続いてリンメイも大きな声をあげる。

「赤い！熱を帯びているのかしら？」

R v 26の耳元が赤く輝く。

「熱で赤くなっているわけではありません。火炎土器の表面温度はマイナス百二十度です」

火炎土器がすぐに土色に戻る。

「どういうこと？」

ブラックシャークが降下するとフォルダーの音がミトに届く。

「巨大コンピュータはここにはいない」

「どうしてわかる」

「うちのオンボロコンピュータが言っているのだから間違いない」

フォルダーが中央コンピュータに向かって念を押す。

「まったくコンタクトが取れないのだな」

「しかし、この付近から時空間移動した形跡はありません」

「どこかに隠れているとでも」

「それはありません」

「ミト、今のところ危険はないようだ。思い切って探索したらどうだ」

「わかった」

ミトは二隻の戦艦をしたがえて鍵穴星に降下する。

「主砲はスタンバイしておけ」

あらゆる方向の攻撃に対応するために砲身が右左に振られる。

「無人時空間移動装置の半数を鍵穴星の上空千キロメートルのところへ移動させろ」

この星へ近づく物体を補足するためだ。

「こんなに外の温度が低いと生身の人間は時空間移動装置で外へは出られないわ」

「ここを前線コロニー化するほどの悠ゆう長な時間もないしなあ」

サーチとホーリーの会話にミリンが割りこむ。

「あれは！」

リンメイがミリンの指差す映像を見る。

「御陵だわ」

今度はホーリーが叫ぶ。

「丸いものがある！」

それはホーリーが関ヶ原の合戦の時代に時空間移動したときに見た円墳とよく似ている。ただ、木がないことだけが違っている。

「裸の古墳、裸の御陵だわ」

サーチが感慨深げにつぶやく。ほとんどが窪地になっているが、フォルダーが言っていたように形あるものも存在する。

「おかしい」

フォルダーからミトに通信が入る。

「何が」

「以前は鍵穴の形をした小山のようなものがかかなりあったのにほとんどない。もちろん、鍵穴のように見える窪地も結構多かったが」

フォルダーがここで言葉を切る。ブラックシャークが地表に到着する。

「フォルダー、リンメイが完全な形をしたものを発見した」

「本当か」

フォルダーが過去の記憶を正確にトレースするとミトに指示する。

「こっちへ来い」

旗艦カシオペアの艦首が大きく右に傾くと前方下に真っ黒なブラックシャークが見えてくる。ブラックシャークの近くには鍵穴の形をした窪地がところせましと並んでいる。

「もつとこっちだ」

ブラックシャークが少し加速して前進する。カシオペアも遅れずに追従する。

「見ろ！」

フォルダーの声がかしオペアの艦橋に響く。

「ああ」

リンメイが誰よりもほんの少しだけ早く悲鳴をあげるが、すぐにそれが全員の悲鳴になる。御陵のちょうど真ん中、方形部分と円形部分のつなぎ目のところが大きくえぐられている。

「のど元が破壊されているわ」

その辺の御陵はほとんどが同じ状況だ。そしてよく見るとそのえぐられたところから巨大土偶のアゴと首の付け根が見える。

フォルダーから断定的な通信が入る。

「付近の温度から、破壊は二日前ぐらいに起こったようだ」

「見直したぜ」

フォルダーが船長室に入ると中央コンピュータに話しかける。

「今まで信用してくれてなかったのですか」

「おまえの言ったとおり巨大土偶の故郷ふるさとだったな」

「あれだけ自信を持って言ったのに」

中央コンピュータが不満を繰り返す。

「まあまあ、チューちゃん、フォルダーは口が悪いから許してあげて」

「今回は我慢できません」

「いや、すまんすまん。これで許してくれ」

フォルダーがホーリーと飲んでいた酒の残りを高々と振りあげる。

「そんなものではだまされません」

「もう一本ある。こちらは未開封の正真正銘の新品だ」

「ありがたくいただきます」

「何だ？現金なヤツだな」

「私、前からふしぎに思ってたんだけど、チューちゃんってどうやって酒を飲むの？」

フォルダーではなく中央コンピュータからの返事がイリに届く。

「爛かんにします。酒は爛かんに限ります」

「ウソー」

イリが可愛い目を丸くして驚く。

「一度いっしょに飲みたいわ」

「酒はひとりで飲むものです」

「よく酒がなくなると思っていたら、くすねていたんじゃないだろうな」

「正直なのがとりえだから白状しますけれど、そうです」

「こいつ！ときどきわけのわからないことを言っていたときは飲んでいたな」

「飲まなきや、やってられないときもあります」

「フォルダー、あなたはチューちゃんによくお酒を飲むでしょ」

イリはこれまでフォルダーの冗談だと信じていたことを白紙に戻す。

「もちろん」

「あきれたわ。どうやって飲むの？コンピューターが」

「意外とちびちびと飲むのがクセだ」

からかわれたと思つてイリがプイと横を向く。

「フォルダー」

ミトからの通信が入る。

「宇宙の地平線の向こう側に移動させていた時空間移動装置三基すべてがこつ然と消えた」

「ミト！地平線の向こうは因果が逆転する世界なんだぞ」

「えっ！因果が逆転するとはどういうことだ？」

「いや、俺も詳しくは知らない」

そのとき、ブラックシャークの中央コンピュータがすべての宇宙戦艦との通信回路を強制的に開く。フォルダーとイリは船長室天井の浮遊透過スクリーンを見つめる。

「緊急事態発生！巨大な時空間移動装置がこの近辺に時空間移動、いいえ、時間移動ではなくて、えーと、とにかく現れます。大きすぎます。すでに時空間がねじ曲がっています」

「あれは」

ミトの、そしてフォルダーの叫び声が完全に一致する。以前の大きさとは比べようがないほどのスケールに成長した紫色の球体が鍵穴星の上空に現れる。真空なのに「ドドド」という振動が直に伝わってくる。

「あの中に巨大コンピュータが格納されているはずだ」

ホーリーが冷静に状況を説明するとミトが大声で命令を下す。

「最大級の攻撃態勢を取れ！上昇だ！」

旗艦カシオペアと二隻の戦艦が上空に待機している七隻の戦艦に向かって上昇する。ブラックシャークも急上昇して同じく最大級の攻撃態勢を取る。

「たたきつぶしてやる！」

フォルダーが拳こぶしを震わせながら、船長室から艦橋に向かう。

「時空間移動装置である以上武器は装着してないだろう」

ホーリーの説明を一通り受けたミトが同意を求める。

「わからない。しかし、あの時空間移動装置は常識をはるかに越える大きさだ。俺たちのちっぽけな時空間移動装置を下敷きに判断すると、判断そのものを誤ることになりはしないか？」

ホーリーは慎重だ。ブラックシャークの中央コンピュータも警告を断続的に発する。

「以前申し上げたことを思い出してください。あの超巨大時空間移動装置にはワレワレの想像力をはるかに超えた攻撃力があると認識してください」

そのとき低く重い声が船内に響く。

「おまえたちの武器でワタシと戦うことは不可能だ。いや、武器の問題ではない。神を攻撃すれば手痛い罰を受けることになる」

「おまえは巨大コンピュータだろう」

「神だ」

ホーリーがミトを制してささやく。

「主砲を発射すればこちらに戻ってくるという特殊なバリアーを持っている」

「わかつてる。その話は以前聞いた」

ミトがホーリーにささやき返す。そして即座にフォルダーに攻撃を差しひかえるように伝え、るとすぐに怒鳴り声が帰ってくる。

「超巨大時空間移動装置から離れろ！」

紫色をした超巨大時空間移動装置が十隻の宇宙戦艦との距離を徐々につめる。

「無理だ！主砲を発射すれば逆にやられるぞ」

ミトに替わってホーリーがフォルダーに説明する。

「とにかく、すぐに離れろ！ここは俺に任せろ！」

ホーリーはフォルダーの言葉にふしぎなものを感じる。そしてフォルダーが何か秘策を持っていると確信する。

超巨大時空間移動装置が宇宙戦艦との距離をさらにつめる。ミトは距離を取ろうと鍵穴星の向こう側に艦隊を進ませる。そのときR v 2 6がミトに近づいて大きな声を出す。

「このまま進むと宇宙の地平線に出ます」

ミトのこめかみがピクツと動く。超巨大時空間移動装置がますますミトたちの艦隊を宇宙の地平線の方に追いこむように接近する。

「速度を上げろ。超巨大時空間移動装置の反対側に回りこめ」

すべての宇宙戦艦が加速する。超巨大時空間移動装置も自転する速度を上げながら加速して

戦艦の回避行動をさえぎる。フォルダーから叫ぶような通信が入る。

「何をまたもたしている。早く空間移動してどこかに隠れろ」

「できない。今さっき地球からここへ空間移動して来たばかりだ。いったん空間移動すると六時間、時空間移動はもちろんのこと、少し時間を置かないと空間移動さえもできない」

「何だと！ホーリーたちの戦艦はポンコツじゃないか」

フォルダーが安然とする。時空間移動装置は臨機応変に時空間移動可能だが宇宙戦艦はそうはいかない。そのかわり武器をたらふく装備することができる。しかし、ブラックシャークは違う。時空間移動装置と同じようにいつでも直ちに時空間移動を自由に行うことができる恐るべき海賊船だ。

「くそー。今、攻撃するとホーリーたちをまきぞえにしてしまう」

フォルダーの無念そうな通信が流れる。

「神に逆らうことは許されない」

再び巨大コンピュータの重々しい声が聞こえてくる。すぐさまフォルダーが反論する。

「何が神だ。少しばかり作戦がうまくいっているだけじゃないか」

旗艦カシオペアでは住職がマイクを持つホーリーに近づく。

「そのマイクで巨大コンピュータと通信ができるのか？」

「できます」

住職がおもむろにマイクをホーリーから受けとると、軽くせき払いをしてから巨大コンピュータに向かってしゃべりだす。

「わしは仏の教えに身をおく僧侶じゃ。神様、聞こえるか」
返事はない。住職が一呼吸おいてさらに言葉を続ける。

「あなたが神様なら、この宇宙を創造したのはあなたか？」
住職の持ちあげた言葉に巨大コンピュータが反応する。

「そうだ。おまえたちを生かすも殺すも、神であるワタシの気持ち次第だ」
住職のしわばんだ顔に血の気が広がる。

「神様の力は認める。しかし、それは脅し以上でも以下でもない」

「ならば、今すぐワタシの偉大な力を見せてやろう」

「すべての人間を今すぐ消し去ることができると言うのじゃな」

超巨大時空間移動装置の回転が少し遅くなる。しかし、宇宙戦艦との距離は縮まる一方だ。

「このままでは超巨大時空間移動装置に触れて粉々になるか、宇宙の地平線に吸いこまれるか、危険な状況です」

R v 26 が警告する。

「ワタシの力を見せてやろう……」

「見せしめなドケチなことをするのなら、それは神の行為ではない。すべての人間を今すぐ抹

殺してみる。今すぐじゃ！」

住職は骨ばった長い人差し指をあらぬ方向にかざして空を切ると、ホーリーがミトに耳打ちする。

「住職が時間を稼いでくれるかもしれない」

「空間移動の準備を急げ」

ミトがRv26に命令する。

「住職が神だとしたら、まるでアナログの神とデジタルの神の戦いだ」

ホーリーが口角を飛ばしてマイクに向かってしゃべる住職を見つめる。ミトがホーリーにうなずくと誰に言うのでもなく、言葉を発する。

「ブラックシャークにあの超巨大時空間移動装置のバリアーを打ち破るような兵器があるのか」

ホーリーやミトの言葉が聞こえないほど住職の大きな声が巨大コンピュータに向かう。

「どうした！ 神様！」

住職がメイン浮遊透過スクリーンを仰ぎみる。その視線を艦橋の窓に移すとすぐそばに超巨大時空間移動装置が壁のように立ちはだかっている。

住職の言葉はまるで電光を発するかのようにはげしくなる。

「返事をしろ！ すべての人間を抹殺できんのなら、宇宙を創造した神ではないぞ！」

いったん落ちた超巨大時空間移動装置の回転が急に速くなる。

「……すべての人間を抹殺すれば……ワタシの力を知る者がいなくなってしまう……」

ホーリーが止めていた息を一気にはき出して隣にいるサーチの手を握ってつぶやく。

「無限後退だ。巨大コンピュータが無限後退に陥るぞ！」

「神というものは、人間がいないと存在せんのじゃ！」

「ワタシは……神……神……」

超巨大時空間移動装置の回転がますます加速する。

「これ以上回転が速くなると、この付近すべての時間が不安定になります」

R v 2 6 が悲痛な声をあげるのと、ホーリーが住職からマイクを取りあげるのが同時だった。ブラックシャークの中央コンピュータが通信回線に割りこんでくる。

「緊急事態発生！全艦衝撃に備えろ。もう一回しか言わないぞ。衝撃に備えろ！」

超巨大時空間移動装置を中心に空間が大きくねじれはじめて、超巨大時空間移動装置にも宇宙戦艦にもブラックシャークにもそしてかなり離れた鍵穴星にも、宇宙の地平線からとてつもないエネルギーが押しよせてくる。

ブラックシャークのエンジンがゼロからいきなり最高出力になる。ブラックシャークに呼応するように各戦艦も急加速する。目には見えないが宇宙の地平線から膨大なエネルギーが向かってくる。ブラックシャークや宇宙戦艦はまるで宇宙の地平線の彼方から急に現れた巨大な津

波に気が付いて必死で高台に登ろうとしているかのように見える。

巨大なエネルギーが最後尾の宇宙戦艦のみこむ。その戦艦は木の葉がきりもみ状態になると航行不能になる。その次の戦艦もそしてその次の戦艦もそしてついにカシオペアも航行不能になる。

「反転！全速前進！」

中央コンピュータが自ら舵を握ってブラックシャークをコントロールする。ブラックシャークは津波に向かうように反転してまっしぐらに目の前まで迫る巨大なエネルギーに突っこむ。強烈な衝撃がブラックシャークに襲いかかる。ブラックシャークの主砲が何本か折れ、艦橋の一部がくずれかける。

「緊急空間移動！」

フォルダーが叫ぶと中央コンピュータも叫ぶ。

「ショートワープ！」

ブラックシャークがもがきながら、すさまじいエネルギーの中心に突っこむ直前に姿を消す。

津波のようなエネルギーはどこに消えたのか、鍵穴星のまわりは再び静かな暗闇の空間に戻っている。ブラックシャークのワープは押しよせる巨大なエネルギーを避けるためだけのショートワープだった。しかし、艦橋には十数個の補助灯が頼りなく輝くだけで、その補助灯を頼

りにフォルダーがシートベルトを外して船長席から立ちあがる。

「イリ」

隣にいるはずのイリから返事がない。

「イリ！」

暗闇に慣れてきたフォルダーの目が副船長席もろとも投げだされたイリを見つける。

「胸が、胸が」

イリのうめき声が聞こえる。イリの胸にシートベルトが食いこんでいる。

「抜けだせるか」

イリが「うっ」という短い声をあげる。

「ウオー」

渾身こんしんの力をこめてフォルダーがシートベルトを引きちぎるとまわりの者がイリを引っ張りだす。

「回復剤！担架を持ってこい！」

誰かが小さなビンを差し出すとフォルダーがふたを食いちぎってイリの口に押しこむ。

「う」

イリが短くうめく。

「骨折しているのか」

「大丈夫、心配しないで」

フォルダーが担架に載せられたイリを心配そうに見送った直後、スピーカーからひび割れた声が聞こえる。

「うーん」

「中央コンピュータ！どうした？」

「気を失っていたようです。すぐ現状を把握します」

フォルダーは中央コンピュータがまだ十分余力を残していることに気付いて冷静さを取り戻す。

「まず、全員の安否を確かめろ」

フォルダーが足元に注意しながらバチバチという音をたてて火花が飛んでいる場所に向かう。

「感電しないように配線を切れ。漏電に気を付ける」

素早く誰かが火花に消火カートリッジを向ける。

「負傷者は？」

「イリです」

「本当か」

フォルダーが手を打つ。

「イリだけが重傷者か。どおりで中央コンピュータに強い緊張感がなかったわけだ」

フォルダーがコードレスのマイクを肩から取りだして医務室に連絡を入れる。

「イリは？」

「鎖骨を骨折しています。大したことはありません」

「すぐ治療にかかれ」

フォルダーがほっとため息をついてから天井に向かって大きな声を出す。

「中央コンピュータ！」

「ハイ、今すぐ報告します。ブラックシャークの損傷は軽微ですが主砲が三門折れました。エンジンまわりは問題ありません。船長室は全壊です」

「そうか」

「ただ……」

フォルダーの脳裏にホーリーの顔が浮かぶ。

「宇宙戦艦は恐らく壊滅状態かいめつだと思われます」

「すぐに救援に向かう！手配しろ」

「すでに宇宙戦艦に向かっています」

第四十九章
宇宙の地平線

【時】 永久0274年 ?年

【空】 鍵穴星

【人】 ホーリー サーチ ミリン ケンタ ミト 五郎 フォルダー イリ
住職 リンメイ Rv26 TW5 巨大コンピュータ

「カシオペアの医療設備が役にたたない。重傷者二名をそちらに移送したい。」

「わかった。すぐに受入準備にかかる」

フォルダーはとりあえずミトに返事をしてから時空間移動装置の格納室に向かうが、イリが
とても動ける状態ではないことに苦慮する。

時空間移動装置から降りてきたホーリーが悲痛な表情でフォルダーを見つめる。

「俺は大丈夫だが、ほかの者はご覧のとおりだ」

時空間移動装置の中で血みどろになってリンメイと住職が倒れている。

「医務室に連れて行け！」

リンメイと住職が担架で運ばれる。いっしょに来たミリンが担架にくっついて医務室に向か

う。もう一基の時空間移動装置から苦痛で顔をゆがめながらサーチがケンタの肩を借りて医務室に向かう。そんな様子を見ながらフォルダーが申し訳なさそうにホーリーに声をかける。

「残念ながらイリが負傷した。十分な手当ができるかどうか……」

「大丈夫だ。ミリンという優秀な看護師がいる。それに元医師のサーチもいる」

ホーリーが精一杯元気な声でフォルダーに告げる。

「そうか。ところでミトの姿が見えないが」

「ミトは五郎とともにアンドロイドに指示を出すためにカシオペアに残っている。それより超巨大時空間移動装置はどこへ行った？」

「わからない」

フォルダーはホーリーとの会話を旗艦カシオペアのミトに流す。

フォルダーとホーリーが医務室に入るとミリンがホーリーに報告する。

「お母さんは打ち身が残っている程度で軽傷です」

「そうか、よかった。住職とリンメイは？」

すでにサーチが足を引きずりながらベッドのリンメイや住職の間を忙しく行き来している。

「お母さん、無理しないで」

「私は医者よ」

サーチがリンメイの横で腰を落とす。

「元でしょ」

リンメイが苦痛を見せずにサーチを見つめる。

「そうね。元医者だったけれど、現役に復帰するわ」

「無理するな」

ホーリーも心配そうにサーチを見つめる。

「無理するなと無理を言いたいでしょ」

サーチが苦笑いするとホーリーも苦笑いする。

「ホーリー、ちょっといいか」

ホーリーがげげんそうな表情をするフォルダーに近づく。

「サーチはおまえの妻だな」

「そうだ」

ホーリーがふしぎそうにフォルダーを見つめる。

「生命永遠保持手術を受けていないのか」

「そんなことか。受けていたが生命永遠保持手術の効果が消えてしまったんだ」

フォルダーはホーリーの母親のように見えるサーチがとてもホーリーの妻には見えなかった。
「なぜ、効果が消えた？」

「時間島に包まれたからだ」

「おまえは？」

「俺は巨大コンピュータと戦うために再び生命永遠保持手術を受けた」

フォルダーが以前聞いた話を思い出して納得すると医務室の奥に向かう。遠慮するようにベッドに身体を横たえていたイリが急に起きあがる。

「ここは私が仕切ります。フォルダーは次に備えて」

イリがベッドから立ちあがって腕を通して白衣を羽織ると、白衣がイリの身体にフィットする。慣れた手つきで床に散乱した医療機器や薬品を片付けながら、必要と思われる薬品を住職のベッドの横の棚に置いていく。

「イリ！」

「ここは私のテリトリーよ」

フォルダーはイリの性格を熟知している。イリはいったん言いだしたら絶対あとへは引かない。

「わかった。任せる。ホーリー、艦橋へ」

「ワレワレは直径三十光年ぐらいの球形の空間にいます」

ブラックシャークの中央コンピュータが弱々しく報告する。

「直径三十光年？」

「そうです。銀河系の中心部程度の大きさしかない狭い空間です」

「どういふことなんだ」

「よくわかりません。今ワレワレがいる宇宙はとても狭いということです。それに存在する星は今のところあの鍵穴星だけです。ここは暗黒の宇宙です。光り輝くものは何ありません」

「俺たちは狭い空間に幽閉されたとでも？」

「その言葉は今のワレワレにふさわしい表現です」

「巨大コンピュータは？」

「探索中です。住職との問答で無限後退におちいったようです」

「無限後退？」

フォルダーが疑問符をつけた言葉を中央コンピュータに向ける。説明するのは中央コンピュータではなくホーリーだ。

「コンピュータがおちいるワナだ。例えばある数字をゼロで割るような演算を……」

「それぐらいのことは俺でもわかる」

フォルダーがムツとしてホーリーをにらむ。

「俺が知りたいのは、なぜ住職との問答で巨大コンピュータが無限後退に陥ったのかだ？」

「恐らく自らを神と定義したのが無限後退の始まりだったと……」

中央コンピュータが割りこんでくる。

「自ら神と名乗ったのに、神ではないということが判明したからです。軽々しく神などと名乗るから、天罰が下ったのです」

ホーリーは中央コンピュータの言葉に驚く。

「そのとおり……だが、これが中央コンピュータのセリフか？」

艦橋にいるホーリーだけではない。医療室にいるサーチやリンメイや住職もスピーカーから流れる中央コンピュータの見解に驚く。ホーリーがフォルダーにたずねる。

「ブラックシャークの中央コンピュータは人間そのものじゃないか」

「住職の言葉はすごい迫力だった」

フォルダーはホーリーの質問に答えることなくしきりに住職に感心する。ホーリーはフォルダーがまともな返事をしないので、仕方なく現状を分析する。

「巨大コンピュータは自らをコントロールできなくなって消滅したのでは？そして消滅エネルギーで俺たちは宇宙の地平線に投げだされて、この奇妙な空間に閉じこめられた？」

ホーリーの疑問に中央コンピュータが応える。

「そうであれば、半分喜んでいいと思います」

フォルダーがホーリーと中央コンピュータに当面の問題を提起する。

「この空間から脱出する方法を考えなければ。それにブラックシャークを修理しなくては」

「ワタシは探索を続けて脱出方法を考えます。修理はフォルダーがしてください」

「こいつ、楽な方の仕事を取ったな」

「何なら、交換しましょうか」

「わかった、わかった。おまえの言うとおりにする」

ホーリーはフォルダーの苦虫をかみつぶすような表情を見てあきれる。

「ブラックシャークのボスはいったい誰なんだ？」

各宇宙戦艦からの報告は深刻なものばかりだ。ブラックシャーク以外の戦艦の修理ははかどらないどころか、アンドロイドに凍死者が続出する。

「この宇宙は絶対温度十度ぐらいしかない」

ミトからの悲痛な通信がブラックシャークの艦橋に響く。

「二番艦と五番艦のエンジンは完全に停止。艦内はマイナス二百度。アンドロイドが動かなくなった。いや、残念なことに永遠に動くことはないだろう」

「航行可能な戦艦は？」

フォルダーの質問にすぐミトが返信する。

「カシオペアと三番艦、八番艦の三隻だけだ」

「アンドロイドをブラックシャークと三隻の戦艦に移動させよう」

「できるものなら、そうしている。時空間移動装置も動かない。温度が低すぎる。航行可能な戦艦もエネルギーがなくなればそれまでだ。この宇宙にはエネルギーを提供する太陽が存在しない。すでに中央コンピュータも機能を停止している」

フォルダーがやがて同じ危機がブラックシャークにも及ぶことを感じて戦慄を覚える。

「戦艦内部の温度と外部の温度差が大きすぎる。残りの戦艦もそしていずれはこのブラックシャークも外壁に亀裂が走るぞ」

「鍵穴星にエネルギーはないのか」

ホーリーがやつとの思いで言葉を発する。

「岩だらけの小さな星です」

ブラックシャークの中央コンピュータの否定的な見解が艦橋に沈黙を強制する。その艦橋の外が急に明るくなる。

「衝撃に備えろ！」

中央コンピュータが短く叫ぶ。はるか彼方に強烈な光源が出現する。

「全員、何かにしがみつけ」

フォルダーは叫びながら船長席の椅子を両手でつかむと艦橋のメイン浮遊透過スクリーンに視線を移す。光源は余りにも明るすぎてその姿を確認することができない。中央コンピュータの予想が外れたのか、ブラックシャークは揺れることもない。

「人騒がせな」

「フォルダーは光源の色がブルーに変わっていくのを見つめる。」

「あれは何だ」

「わかりません。突然現れました。エネルギーがない、何かです」

「フォルダーがとつさにマイクを握りしめると大声をあげる。」

「時空間バリアーを張れ！急げ！ミト、聞こえるか？バリアーだ！」

「ブラックシャークを時空間バリアーがとりまく。フォルダーからの緊迫した声にカシオペアと二隻の戦艦も時空間バリアーを張る。しかし、ほかの宇宙戦艦は何の反応も示さない。」

「船外は暗黒の世界からブルー一色に急変する。どの方向を見てもどこまでも秋の空のようなブルーだ。」

「何だ？」

「フォルダーだけが声を出す。青い空間に突然白い点が粉のようにいたるところに現れる。青い空に無数の白いごま粒を散らしたように見える。中央コンピュータからカン高い声がする。」

「時間が暴走しています」

「時間が暴走？」

「急速に時間が進んでいます。これはもう暴走と呼ぶにふさわしいスピードです」

「フォルダーがメイン浮遊透過スクリーンの右下に表示されている時計を見つめる。時計は一

秒一秒正確に時を刻んでいる。

「時間が暴走しているようにには見えないが」

「時空間バリアーに包まれているからです。船外の時間は驚くほどの速さで進んでいます。フオルダーの時空間バリアー命令は的確でした」

「あっ！」

ホーリーが叫ぶ。サブ浮遊透過スクリーンに映っている宇宙戦艦の主砲が消えていく。そして艦橋もくずれる。

「あっちの戦艦もだ！」

フオルダーが別のサブ浮遊透過スクリーンを指差す。

「信じられない。真空なのに風化しているように見える」

バリアーを張っていない銀色の宇宙戦艦が真つ黒な塊かたまりとなる。

「あれは？」

フオルダーが声をしぼりだす。いつの間にかごま粒のような無数の白い点が線に変わっている。その線は正確に格子状の模様（グリッド）を次々と誕生させる。青い空間が方眼紙のように見える。どこを見ても基盤の目のような青い空間が広がっている。そして白い線で囲まれた青い正方形の一つひとつがどんどん大きくなる。

時空間バリアーに守られているカシオペアと二隻の宇宙戦艦以外の宇宙戦艦は原形をとどめ

ることなく黒い粉が集まった雲のようになる。

まさに宇宙戦艦の残骸がその姿を消そうとする寸前、グリッドの拡大が止まる。今度はゆっくりと縮小しはじめる。

「時間が逆転します」

中央コンピュータが興奮する。グリッドの一つひとつがどんどん縮小する。点に戻るような勢いで縮んでいく。

「宇宙戦艦が復元する……」

フォルダーが中央コンピュータの言葉の意味を理解する。

「時間が戻る」

白い線で囲まれた青いグリッドが一定の大きさまで縮小すると今度は膨張に転ずる。そしてある程度大きくなると縮小を始める。まるで呼吸をするように大きくなったり小さくなったりする。

「時間が暴走状態から安定化しはじめました」

中央コンピュータが感激するような声でフォルダーに報告する。その都度、宇宙戦艦は元の姿に戻りかけてはくずれていく。

サーチが何かを思い出そうと目を固く閉じてホーリーに言葉をかける。

「ずいぶん前に瞬示と真美がふしぎな話をしていたこと、覚えてる？」

ホーリーが首を傾げる。

「あのふたりの話はふしぎなことばかりだ」

「どこかの小径こみちを歩いていたら、崩壊と復元を繰り返す山門を見たという話に絡んで……」

ホーリーも目を閉じる。

「思い出した！確か空に現れたグリッドがふくらんだり縮んだりしたという……」

「そう！空が方眼紙のようになって、時間が暴走しているような感じだったと言っていたわ」

「何のことかさっぱりわからなかったが、こういうことを言っていたのか」

「あのグリッドはいずれ消えるのかしら」

誰の目にもグリッドが膨張したり縮んだりしているのが見えるし、その動きに合わせるかのように七隻の戦艦が元の形に戻ったり、くずれる光景が目の前で繰り返される。

「これが、時間が進んだり戻ったりするという現象なのか」

フォルダーがホーリーとサーチの話をもじつと聞く。ホーリーは瞬示と真美のような超人的な人間が見た現象と同じものを目の当たりまにしていることに感激して全身を震わせる。サーチも同じ感覚を共有するが冷静さを維持するのに苦労する。

「時間が安定します」

中央コンピュータの声とともにグリッドがフーツと消える。七隻の戦艦はまるで幽霊船のよ

うな無惨な姿をさらけ出す。

「あの戦艦のアンドロイドはどうなったんだ？」

ホーリーがしんみりと目を閉じる。

「空の色が変わる」

空だと勘違いするぐらいの青い世界の色が徐々に紺色に変化する。

「陽が落ちて夕闇になるような感じがするわ」

サーチが感傷的に変化していく色を分析する。

「地球の黄昏時たそがれどきのようだよ」

ホーリーもサーチにつられるようにうっとりとした眼差まなざしで紺色の外界をながめる。やがて黒に限りなく近い紺色となり、再び暗黒の宇宙に戻る。

「太陽のないふしぎな黄昏たそがれだった」

ホーリーがサーチの肩に手をかけたとき、サーチはメイン浮遊透過スクリーンの画面の変化に大きな声をあげる。

「あれは！」

遠くにピンク色の光が現れる。ほんの針の先ほどの小さな点に見えるが、明るく輝いている。

「警戒せよ！」

中央コンピュータが警告を発する。

「何だ！」

「こちらに向かって物体が近づいてきます」

「物体？」

「不明です。とてつもなく大きな物体です」

「メイン浮遊透過スクリーンに投影しろ」

全員が目をこらしてメイン浮遊透過スクリーンを見つめる。黒い球体の表面をピンク色の光線が点滅しながらかけまくっている。そのピンクの光線の動きから黒い球体の存在が確認できる。黒い球体は完全な球体ではなく、表面はうねるようないびつな形をしている。

「まるで脳のまわりをニューロンが光を出しながら飛びまわっているようだわ」

サーチとリンメイが印象を共有する。すぐに低音の重々しい声が艦橋にこだまする。

「神だ」

「誰だ？この声は」

「ワタシではありません」

中央コンピュータが否定するとともに「あっ」と叫ぶ。

「そうだよ、ワタシだ。この宇宙の神だ」

「これは毎度おなじみの巨大コンピュータの声です」

「今いるこの宇宙を造ったのはワタシだ。そしてこの宇宙にはおまえたち以外誰もいない」

ホーリーがミトに無言通信を送る。

「巨大コンピュータからの通信が聞こえるか」

「ああ、また神だと言っている」

「そうか、あつ、また何かしゃべりだした」

ホーリーが無言通信を遮断して巨大コンピュータの言葉を待つ。

「中央コンピュータのデータを放出せよ」

「いやだ」

すぐに中央コンピュータが拒否する。格が違うはずなのに巨大コンピュータが中央コンピュータの反論に対応できずに手を焼く。

「ちやちなコンピュータの分際で生意気な」

「コンピュータにもプライドがある。それに個人情報を守らなければならない」

「ほざくな！」

遠くの方で急に火の玉のような輝きが発生する。と同時にミトから通常の通信が入る。

「三番艦が跡形もなく吹っとんだ！」

「よく考えるんだ。慈悲を与えよう。二十四時間の猶予を与える」

巨大コンピュータの声が響く。

「なぜそんなに俺たちのデータが欲しいのだ。神なら何でも知っているはずじゃないか」

フォルダーがありつたけの声を出す。巨大コンピュータからの返事はない。

「ニセの神様！下手くそな会話をして無限後退におちいらぬように用心しているのか？」

中央コンピュータも挑発するが巨大コンピュータは乗ってこない。「二十四時間の猶予」というのが最後の言葉になる。

「どうやら、何らかの方法でワレワレをこの小さな宇宙に閉じこめたようです。それにしてもこの宇宙の二十四時間というのはどれくらいのことか、よくわかりませ
ん」

中央コンピュータの声が普段の調子に戻る。

「調べる」

「わかっています」

中央コンピュータもそれ以上しゃべらなくなる。

「何てことだ」

フォルダーが床に視線を落としてうなだれる。

「体制を整えよう」

ホーリーがフォルダーの肩に手を置く。

「何をすればいい？」

「フォルダー！」

ホーリーが手を振りあげるとフォルダーのほほを思いつきり引つ叩く。

「弱気になるな！海賊だろ」

フォルダーは横向きになった顔をそのままにして視線だけをホーリーに向けてニヤツと笑う。

「一発借りておく。全員に告げる。損傷箇所を調べてすぐに報告しろ！」

ホーリーがミトに無言通信を送る。

「どうする？士気がかなり落ちている」

ホーリーにはミトが大きく息をしているのがわかる。

「まず……」

「まず？」

「生命永遠保持手術を施したい。ブラックシャークで手術は可能か？」

ホーリーがフォルダーにミトの意見を伝える。

「もちろん」

「俺以外の者にも言ったように時間島の影響で生命永遠保持手術の効果が消滅している」

ホーリーの説明にフォルダーがうなづく。

「そうだったな。イリに手術させよう」

「イリは大丈夫か」

「頼まなくても、イリは手術するだろう。そういう性分だ」

ホーリーが再びミトに無言通信を送る。

〔ブラックシャークで生命永遠保持手術を受けてくれ〕

〔私にはまだやらなければならないことがある。生命永遠保持手術はもちろんだが、海賊たちに無言通信のチップを埋めこもう〕

再びホーリーがフォルダーにミトの考えを伝える。フォルダーは納得するが、肝心の無言通信チップをどのようにして手に入れるのかをたずねる。

「R v 2 6 なら……」

ホーリーはR v 2 6を呼びだすと、今後の作戦を伝えてからたずねる。

「わかりました。チップはワタシが製造します。一時間もあれば百個ぐらいは製造可能です」

フォルダーがホーリーとR v 2 6の通信に割りこむ。

「手術にどれぐらいの時間がかかる？」

「サーチやリンメイなら数秒で処理するはずだ」

ホーリーがR v 2 6に替わって応える。

「わかった。ミトも戦艦の修理に全力で取りくんでくれ」

「ああ」

ミトの声には力がこもっていない。

「カシオペアはともかく、八番艦は修理するだけの価値はない。修理したところで航行は不可

能だろう」

「やってみなければわからない！」

ホーリーが叫ぶが、ミトの声は力のないままだ。

「できるだけやってみる」

「一段落ついたらこちらに来て生命永遠保持手術を受けるんだ」

「承知している」

「イリの手術の腕は神業だわ」

サーチが驚くのも無理はない。天才と言われたリンメイをはるかに超えるほど手際がいい。

「我流よ。大したことはないわ」

「それにブラックシャークの生命永遠保持手術の設備は素晴らしいわ」

久しぶりに全員から大きな笑い声が手術室に充満する。それは手術台のカプセルで目を閉じている住職がとても凛々しく変身したからだ。

「あの住職の二十歳代の姿って想像できなかつたけれど、すごーくハンサムじゃないの」

「それに筋肉質だわ」

イリとサーチが感心して住職の全身を見つめる。鈴が鳴るように若くなったリンメイは何も言わずにはにかむ。一方ミリンは童顔のケンタを見つめる。ちょうど二十歳のミリンは生命永

遠保持手術を受けても変わることはない。

Rv26とアンドロイドの製造技術は大したものだった。わずかな間にブラックシャークの海賊全員分の無言通信チップを製造した。サーチとリンメイが休む暇もなく海賊たちにチップを埋めこむ。

「フォルダー、聞こえるか」

「聞こえる。ホーリーの言葉が直接脳に伝わってくるぞ。大したものだ」

「これで我々は通信機を使わずにお互いの意思を確認しあえる。神といえども盗聴は不可能だ」

そのとき、ホーリーがミトからの無言通信を受けとる。

「一難去つてまた一難だ」

「どうした、ミト」

「八番艦のエンジンが停止した」

ミトは同じ内容の無言通信をフォルダーにも送る。フォルダーが中央コンピュータを呼ぶ。

「ブラックシャークはあとどれくらい機能を保てる？」

「いつ機能が停止してもおかしくありません」

「なぜ早くそのことを知らせなかった？」

「余りにも皆さんが明るいので言いそびれてしまいました。しかし、この状況はワレワレにと

つて有利です」

フォルダーもホーリーも首をひねる。フォルダーがひねった首を元に戻す。

「説明しろ」

「そのうち、ワタシも動かなくなります。そうするとワタシのデータはもちろん消滅します」

「違う！データは消滅しない」

ホーリーがまわりの者全員がビックリするような大声を發する。

「コンピュータの記憶装置が凍りついたとしても解凍すればデータは復元できる！」

ブラックシャークの中央コンピュータが珍しく威厳いげんに満ちた声でホーリーに反論する。

「ワタシは意思を持っています。意思を持っている者は死ぬときは死にます。あとには何も残

りません」

「なんと、人間と同じじゃ！」

若い住職が腰を抜かす。

「データはメモリーに残るはずじゃないか」

ホーリーが住職を気にしながら中央コンピュータに食いきがる。

「ワタシには普通のコンピュータが備えているようなメモリーはありません」

フォルダーがホーリーの肩をたたいて、いつの間にかもう一方の手に酒ビンを持ってニヤツとする。

「中央コンピュータのところへ行って作戦会議だ。まあ、死ぬつもりで戦うだけだという結論しかないと思うが」

イリがフォルダーに近づくと酒ビンを取りあげる。サーチも同行しようとするが、フォルダーがイリから酒ビンを取りかえすと手を広げる。

「ホーリーと俺と中央コンピュータの男三人で作戦を練る」

フォルダーがホーリーをうながすと生命永遠保持手術室から出ていく。イリとサーチの不機嫌そうな表情とは対照的に住職が興味深くフォルダーとホーリーの後ろ姿を見つめる。

「カシオペアは航行可能か？」

フォルダーがミトに無言通信を送る。

「補助エンジンが何基か使える」

「それでいい」

「どうする気だ」

「見ればわかる」

ブラックシャークがフォルダーの命令どおり旗艦カシオペアに近づいて寄りそいはじめる。

「巨大コンピュータが言っていた期限まであとどれくらいだ」

「五十分ほどです」

「白兵戦用のロープの発射準備を急げ！」

フォルダーが命令した白兵戦用のロープというのは、敵艦にブラックシャークを横付けして乗り移るためのものだ。カシオペアに平行してブラックシャークが距離をつめていく。

「すべてのロープをカシオペアに向かって発射！がんじがらめにしろ！」

先端に小型の推進装置を持つ二十本ほどの太いロープがブラックシャークの側面からまっすぐにカシオペアに向かうとぐるぐる巻きにする。

「よし、たぐれ！」

一本一本のロープが次々とびーんと張ったところでフォルダーが叫ぶ。

「微速前進。鍵穴星へ向かう。ゆっくりと加速しろ！」

ブラックシャークがカシオペアを曳航^{えいこう}する。

「ちよっと待ってくれ！」

ミトがフォルダーにクレームをつける。

「鍵穴星にどうやって着陸する？小さい星だといっても引力でぶつかってしまおうぞ！」

「鍵穴星に近づいたら逆向きに引っぱる！」

「無茶だ！」

「座して死を待つというのか！」

「なぜ鍵穴星に行かなければならないのだ！」

〔巨大コンピュータの出方次第では鍵穴星を破壊する〕

ミトはフォルダーの作戦にしぶしぶ同意するとフォルダーとの無言通信を停止する。ホーリーがふたりの無言通信が終わった感触を持つとミトを無言通信で呼びだす。

〔ミト〕

〔そちらの作戦、了解している〕

ホーリーはミトがフォルダーの作戦を承知してくれたことに胸をなでおろす。しかし、一方ではミトと五郎がまだ生命永遠保持手術を受けていないことに一抹の不安を覚える。

ブラックシャークとカシオペアが鍵穴星に近づく。ミトがフォルダーに無言通信を送る。

〔補助エンジンを逆噴射させる準備に入った。地球連邦軍を代表して礼を言う。アンドロイドもフォルダーに感謝している〕

ブラックシャークが方向を百八十度転換して鍵穴星の引力に抵抗するかのようにエンジン出力を上げる。降下速度が少し遅くなる。ロープがはち切れんばかりに伸びる。

〔ロープを切れ！〕

ミトからフォルダーに悲痛な無言通信が入る。

〔まだだ！〕

〔こちらにも補助エンジンを点火するタイミングがある。このままではいっしょに激突してしまふ。十秒後にロープを切り離してくれ〕

「わかった。そちらでカウントダウンしてくれ」

カシオペアの航海士のアンドロイドから声が届く。

「五、四、三、二、一、切れ！」

ブラックシャークの船尾のロープがのたうちまわるように放れていく。カシオペアの補助エンジンが黄色い炎をあげる。

「補助エンジンの出力が足りません。このままでは地表にたたきつけられます」

航海士から悲痛な声が届く。補助エンジンの出力方向が真下ではなく横に向いている。カシオペアがブラックシャークからどんどん遠ざかる。

「ミト！」

ホーリーがミトを呼ぶ。しかし、応答はない。

「五郎！」

五郎からも応答はない。代わりにRv26からの通信が入る。

「ミト艦長と五郎を時空間移動装置でそちらに移動させます。あっ！」

そのRv26からの通信も途絶える。フォルダーがRv26に怒鳴りつける

「どうした！」

「格納室！時空間移動装置が移動してくる。受入準備をしろ！」

「わかりました」

フォルダーをホーリーが心配そうに見つめる。

「この環境で時空間移動装置が正常に作動するか、心配だ」

そのとき、Rv26に似た音声飛びこんでくる。

「こちらは旗艦カシオペアの艦長補佐のTW5。ミト艦長、五郎、Rv26副艦長を時空間移動装置に乗せました。外からロックしています」

「どういうことだ！」

「うまく説明できません」

「ホーリー」

弱々しい無言通信がホーリーに届く。

「ミト？」

「ああ、気絶していた」

「どうしたんだ！」

「Rv26に一発食らった。あつ！五郎！Rv26！」

「どうした！冷静に伝えてくれ」

「どうやら私と五郎、それにRv26までもが時空間移動装置に押しこめられたようだ」

ホーリーがフォルダーのマイクを引ったくる。

「TW5！説明しろ」

「今からミト艦長にRv26の再起動の方法を教示します」

TW5がミトに事細かくRv26の再起動の方法を説明する。

「わかった。やってみる」

カシオペアの格納室の時空間移動装置に閉じこめられたミトはぐったりしたRv26の再起動の作業を開始する。すぐにRv26の耳が赤く点滅する。しばらくしてRv26が身を起すと激怒するような声をあげる。すぐにTW5が釈明する。

「副艦長は時空間移動装置でミト艦長と五郎をブラックシャークに移動させてください。ワタシはここでカシオペアの指揮を取るために残ります」

TW5はRv26ともどもミトと五郎をブラックシャークに移動させようとする。

「何を考えているんだ」

「もう時間がありません。早く移動してください」

時空間移動装置の中でミトが息を飲んでRv26を見つめる。

「早く！」

TW5が叫ぶ。

「TW5！」

Rv26が叫び返す。時空間移動装置がカシオペアの格納室から消える。すぐにブラックシャークの時空間移動装置格納室の海賊からフォルダーに報告が入る。

「こちら、格納室！時空間移動装置を収容しました」

誰もアンドロイドが人間以上の感情を持つて行動していることに違和感を持つことはない。

旗艦カシオペアが艦尾の補助エンジンを使って艦首を鍵穴星に向ける。

「逆だ！カシオペアが鍵穴星に突っこむ姿勢に変えてしまった」

ホーリーがメイン浮遊透過スクリーンに向かって怒鳴る。

「こちら格納室。人間ふたりとアンドロイドひとりを経橋へ案内します」

時空間移動装置格納室からの報告にフォルダーそしてホーリーが胸をなでおろすが、フォルダーが通信回路を確認せずにT W 5に怒鳴りちらす。

「体勢が逆だ。艦尾を鍵穴星に向けて補助エンジンの出力をあげろ」

カシオペアの艦橋内でのやりとりが聞こえてくる。

「補助エンジン出力低下」

「動力室！準備は？」

「完了しました」

「補助エンジンが完全に停止しました」

カシオペアが艦首を下げたまま真つ逆さまに鍵穴星に向かう。R v 2 6が両耳を赤く輝かせながら両肩を落として艦橋に現れる。

「ミト艦長の計画どおり進行中です」

T W 5 が無線で直接 R v 2 6 に報告する。しかし、そのあとの無線通信は T W 5 のカシオペアにいるアンドロイドに対する命令だけで、再び T W 5 が R v 2 6 を呼び出すことはなかった。ミトは黙って R v 2 6 を見つめる。

「動力室。すべてのエネルギーを艦内に放出しろ！」

「放出開始」

「メインエンジン点火！衝撃に……いや、よくやってくれた。感謝する」

T W 5 やアンドロイドの会話に思わず R v 2 6 が無線を送る。

「T W 5！」

R v 2 6 が絶叫する。そのときカシオペアの中央部で大爆発が起こる。真ん中でまっぶたつになって前半分が勢いよく鍵穴星に落ちていく。核融合炉がある後ろ半分は火の玉となって反対方向に吹つとんでいく。ブラックシャークの近辺が急に明るくなる。カシオペアの後ろ半分は小型の太陽のように鋭い光を発しながら鍵穴星から離れていく。フォルダーが R v 2 6 にぶつかるぐらい近づいて叫ぶ。

「何をするつもりだ！」

「カシオペアの動力核融合炉を小型の太陽にします」

R v 2 6 が説明する。ホーリーがすぐさま R v 2 6 の作戦を理解する。

「うまく、鍵穴星を回る軌道に乗ればいいのだが」

どうせ鍵穴星にぶつかるぐらいなら、旗艦カシオペアのエネルギーを暴発させて小型の太陽にしようと思いが発案してRv26が実行しようとしたが、それをTW5が引き継いだ。「どんどん大きくなる」

白色の小型の太陽となったカシオペアの後ろ半分はまぶしくて見えないが、膨張してかなり大きな球体に成長する。そして鍵穴星から離れる速度が徐々に落ちる。鍵穴星の引力が小型太陽を引きとめようとする。

「すごいことを考えたもんだ」

ホーリーが感心して小型太陽をまぶしそうに見つめるRv26の横顔を見る。そのRv26の両耳が赤く輝く。

「TW5！」

「こちらTW5」

「作戦は成功だ。よくやった」

「まだ、鍵穴星を周回する軌道に載るかどうかわかりません」

「いや、確実に載る」

Rv26は確証もないのにTW5を勇気づけようとする。

「ワレワレはあと数秒で鍵穴星に激突します」

TW5の悲痛な声が届く。カシオペアの前半分が鍵穴星の地表に激突する様子がメイン浮遊透過スクリーンに映される。

「TW5！おまえは大したアンドロイドだ」

鍵穴星の一点が明るく輝く。

鍵穴星にブラックシャークが着陸している。その鍵穴星のまわりを小さな太陽が周回している。そして鍵穴星の温度が徐々に上昇する。

「アンドロイドは人間と変わらない感情を持っている」

「いや、人間以上だ」

ミリンがケンタの胸に顔を埋めて泣きじゃくる。サーチがホーリーの手を握って涙を流す。イリは涙こそ見せないがフォルダーのうなずく視線を見つめる。そしてミトがふとさびしさを感ずる。

「キヤミ」

ミトは無意識のうちに無言通信をキヤミに送る。もちろんキヤミからの返事はない。届くはずのない無言通信をまるで大統領に報告するように淡々と送る。そうすることによってミトはさびしさをまぎらわせる。キヤミをいとおしく思う自分に苦笑したとき、無言通信をやめる。

「しかし、ふしぎだな」

ブラックシャークからあまり遠くないところで炎があがっている。カシオペアの前半分が激突した地点だ。こっぴあみじんにかきとんだはずなのに、軟着陸して火災を起こしたように見える。はげしく燃えあがると鎮火してくさぶるように火勢が衰える。そのまま消えてしまうのかと思うと再び急に火力を増すのだ。それをもう何十回も繰り返している。小さな太陽が鍵穴星の反対側を周回しているときは、このたき火のような光がなぐさみものに見える。

「二十四時間たったぞ」

「巨大コンピュータからの通信は？」

フォルダーが通信士に向かって怒鳴る。

「ありません」

「やはり、この鍵穴星にいれば攻撃しにくいのか」

フォルダーの言葉にホーリーが腕時計から目を離す。

「中央コンピュータ！巨大コンピュータから直接おまえに信号が送られていないのか」

中央コンピュータが返事の代わりにビツクリするような報告をする。

「今いるこの宇宙のことがわかりました」

少し感傷的になっていたホーリーをはじめ全員が目覚めたような表情をする。

「巨大コンピュータが鍵穴星とその周辺を引っ張りこむようにして宇宙の地平線を越境したあと、このこぢんまりとした空間に閉じこめられました。ここは時間がとても不安定な時空間で

す」

「もっとやさしく説明しろ」

フォルダーの口癖が中央コンピュータに向かう。

「少なくとも部分的に時間が行ったり来たりしています」

「やさしくと言っただろ」

「この鍵穴星の中心から少し離れたところ、カシオペアの前半分がたき火のように燃えているところがこの宇宙のちょうど中心地点です。艦長補佐のTW5がたき火を作ったのではなく、あの地点を中心に時間が進んだり戻ったりしています。燃えつきそうになると時間が戻って再び火力が強くなる。今度は時間が反転して燃えつきる方向に向かう。燃えつきそうになるとまた逆転する。あの場所を中心に時間がそのようにふるまっています」

ホーリー、サーチ、ミリン、ケンタ、住職、リンメイ、ミト、五郎、Rv26、フォルダー、イリそしてブラックシャークの海賊たちが中央コンピュータの声に耳を傾ける。

「徐々に広がって最終的にこの宇宙全体に及ぶのかどうかはわかりません。この現象がこの宇宙全体に及べば、ワレワレはこの宇宙に閉じこめられる直前の状態に戻るのかもしれませんが。爆発したカシオペアも元に戻ります。もちろんその前にみんな飢え死にしますが、生き返る可能性があります。死んだり生き返ったりの繰り返しが起こるのかもしれませんが」

「何ということじゃ」

「住職がテカテカ光る頭を両手で磨く。」

「警戒！鍵穴星に地震が発生！」

突然、中央コンピュータが警告を発する。半球の丘がメイン浮遊透過スクリーン上で小刻みに震える。

「警戒解除。大きな地震ではありません。メイン浮遊透過スクリーンに映っている丘が崩壊します」

「例の現象よ」

生命永遠保持手術を受けて理知的できりつとした鋭い顔立ちに戻ったリンメイが自信に満ちた声を出す。

「方形の台座からすべるようにして横へ移動して前方後円墳の形になるはずだわ」

リンメイの予言どおり半球の丘が動きだす。そして台座から完全にすべり落ちる。上空から見ると鍵穴のような形になっているはずだ。そして完全に前方後円墳の形をした小山の表面の土がゆつくりとくずれはじめ。ブラックシャークのすぐ近くで起こる奇妙な現象を全員がかたずを飲みながら見守る。

「巨大土偶の誕生だわ」

リンメイだけが声にして、ほかの者は無言でメイン浮遊透過スクリーンを見つめる。後円部分はその形をとどめなくなるほどくずれるとそこから二本の黄色いサーチライトのような光が

現れる。その光は徐々に強烈なはっきりとした柱になって真つ暗な天空に向かう。光が爆発するように昇っていく。

「強力なレーザー光線です。何本も見えます」

中央コンピュータがクロースアップしていた画面を広げる。

先ほどの巨大土偶のまわりには何十体もの巨大土偶が同じように天空を見上げています。しかし、しばらくするとすべての光の柱は弱くなって傾きはじめる。光が弱くなった分その光源が逆に見やすくなる。

「巨大土偶の目がはっきりと見える」

ホーリーが低い声を出す。すべての巨大土偶が同時に上半身をゆっくりと起こす。二頭身のずんぐりした巨大土偶がすくつと立つ。リンメイが言ったとおりの巨大土偶の誕生を目の当たりにする。巨大土偶が天空の彼方をじつと見つめる。

「こうして鍵穴のようなくぼみができたのか」

鍵穴星の命名者のフォルダーがやつと口を開く。

「ここは巨大土偶の『ふるさと』なのかもしれないわ」

リンメイが興奮する。

「ここから次々と巨大土偶が生まれたということなの？」

サーチが確かめるようにリンメイにたずねる。そのとき巨大土偶の顔がブラックシャークの

方に向く。

「俺たちに気が付いたぞ」

ホーリーの顔が青ざめる。

「目がさつきより強く輝いている。主砲！照準を！」

ホーリーの言葉でフォルダーが観念する。

「間に合わない！数が多すぎる！時空間バリアーを張れ！」

「バリアー完了！あの巨大土偶の目から放たれるレーザー光線は星ひとつを破壊するほどのエネルギーを秘めています。しかし、ブラックシャークのバリアーは十分に耐えられます」

中央コンピュータが冷静に言葉を続ける。

「巨大土偶よりも壺つぼのようなものに注目してください」

中央コンピュータがメイン浮遊透過スクリーンの巨大土偶の足元にある小さな壺つぼをズームアップして映し出す。

「火炎土器！」

リンメイが叫ぶ。

「時間が急速に逆転、いいえ縮小します！」

中央コンピュータが警告を発する。その直後に巨大土偶が次々と黄色い光線をブラックシャークに向けて発射する。全員が「あつ」という悲鳴をあげる。しかし、次の瞬間その黄色い光

線は大きく湾曲してあちらこちらにある火炎土器に吸収される。

「繰り返します！時間が急速にギャクテ・・ン・シ・・イエ・・シユー・・シユク・・」

中央コンピュータの声はもちろん誰の声も声になることなく消滅する。消滅するのは声だけではなく、まず巨大土偶が吸いこまれるように小さな火炎土器の中に消え、次にブラックシャークもカシオペアの残骸も液体のようになって火炎土器に吸いこまれて消える。そして、鍵穴星自体も液化化して火炎土器の中に消えてしまう。もちろん鍵穴星を周回する小さな太陽も吸いこまれる。すべてが一瞬の出来事で、まるでアラジンの魔法のランプに大男が吸いこまれるように何もかもが火炎土器に吸いこまれる。あとに残ったのは多数の火炎土器だけで、真っ暗な宇宙空間で怪しい赤い光をあちらこちらで放ちながら浮いている。

その火炎土器も、それぞれが自分で自分を吸いこむようにして消える。まるでヘビが自分のシッポから全身をのみこんでしまうかのように。そして、先ほどまで存在していた小さな宇宙そのものが消えてしまう。